

防衛術としての「片づけ」

——居住空間の非電子的な自己管理への誘導方法の分析——

一橋大学大学院 早川 黎

【1. 目的】

自己責任や自助努力が義務化する中で、居住空間の犯罪リスクの引き受け方もコミュニティ・個人単位となり、監視カメラなどの電子技術を通じた自治へと変化してきている(Rose 1996; Blakely & Snyder 1997=2004 など)。だが、居住空間の自治は必ずしも防犯を主目的とするものでもなければ、電子技術の活用のみで遂行されるわけでもない。牧野(2015)は身体・思考・心のマネジメントを称揚し、その実現のためのハウツーを教示する自己啓発書の一ジャンルとして「片づけ」に関する著作群を挙げ、居住空間という領域から読者が自己啓発へと誘導されていることを他ジャンルとの比較分析と共に論じている。

本報告の目的は、ゲーテッドコミュニティやセキュリティ集合住宅の空間管理とは異なる実践の一例として片づけ系自己啓発書の説明形式を主題的に扱い、その行為がどのように誘導されているのかをより詳細に分析しながら、居住空間の自治のあり方における文脈の複数性を検討することである。

【2. 方法】

本報告では「断捨離」「こんまり」「ミニマリスト」などの2000年代後半から現在にかけて流行している、モノの片づけを主張の基軸とした書籍で多用されるロジックやレトリックをデータとし、読者への片づけの促し方を系統づける。

【3. 結果】

①自然災害からの防衛では、震災により所有物が凶器と化したという流れで、危機管理の一環として片づけが促されていた。②犯罪からの防衛では、モノが少なく清潔な空間は空き巣への防犯効果があるとして片づけが推奨されていた。③好ましい感覚と心理状態の防衛では、視覚・聴覚などの諸感覚に関して、余分なモノが「ノイズ」や「ストレス」という語によって説明され、それらは快適な居住空間の感覚や心理状態を損ねるため捨てるべきとされた。④消費社会からの防衛では、文化産業の広告戦略により不要なモノを消費させられていることへの注意喚起がされ、所有から脱却することで真に自由で豊かな生活が獲得可能とされていた。⑤主体性の防衛では、大量のモノによってその所有者であるはずの読者が一種の隷属状態に陥っていることが「モノの奴隷」と表現され、主体性の回復や主従関係の是正という理路で片づけが有効視されていた。

【4. 結論】

居住空間のコントロール性の上昇は、自然災害や防犯へのリスク管理だけではなく、空間における望ましい感覚経験や心理状態の操作、非拘束感や非物質的な価値などの真に豊かな生活を過剰なモノや産業から自衛する文脈でも展開されており、今日市場に流布する「片づけ」はそうした様式を伴った自己への配慮として実践されながら自治的な責任主体の発明に寄与していると考えられる。

文献

Blakely, Edward J. & Snyder Gail, 1997, *Fortress America: Gated Communities in the United States*, Washington D.C.: Brookings Institution Press. (= 2004, 竹井隆人訳『ゲーテッド・コミュニティ：米国の要塞都市』集文社.)

牧野智和, 2015, 『日常に侵入する自己啓発：生き方・手帳術・片づけ』勁草書房.

Rose, Nikolas, 1996, "The death of the social? Re-figuring the territory of government", *International Journal of Human Resource Management*, 25(3), 327-356.